

2016 7/26

No.2023

毎月第2・第4火曜日発行

# 政経 かながわ

一般社団法人  
— 神奈川政経懇話会 —



高校野球の第98回全国選手権神奈川大会は10日、横浜市中区の横浜スタジアムで開幕し、188校計3535人の球児たちが入場行進した。



## contents

視点・点描	3
「魔物」退治の秘けつとは	
政治	4
薄雲に包まれた与党の大勝 消極的な選択した有権者	
経済	6
10兆円対策は複数年度で 参院選後、経済対策の行方	
国際	8
テロに揺れる縫製大国バングラ リスク拡散に日系も情勢注視	
暮らし2016	10
進む企業のLGBT対策	
広告珍談	12
広告はたのしい②⑩ 混浴？ならぬ！	
NNAアジア経済レポート	13
神奈川景気データファイル	14
神奈川景気データファイル	15

### 事務局だより

#### ◇8月定例講演会

2016年8月25日(木)

午後1時30分～3時

横浜情報文化センター6階

「情文ホール」

講師は新潟産業大学経済学部  
准教授の蓮池薫氏

演題は「夢と絆～拉致が奪い  
去ったもの」

#### ◇会員の動き (敬称略)

名義変更 ▽横浜スタジアム  
代表取締役社長・藤井謙宗⇒  
代表取締役社長・岡村信悟

役職名変更 ▽神奈川中央交  
通代表取締役社長・三澤憲一  
⇒代表取締役会長・三澤憲一

▽テレビ神奈川相談役・牧内  
良平⇒名誉相談役・牧内良平

▽相鉄ホテル代表取締役社長・  
鈴木朗之⇒エグゼクティブア  
ドバイザー・鈴木朗之▽スル

ガ銀行代表取締役社長・岡野  
光喜⇒代表取締役会長・岡野  
光喜

# 視点 点描



## 「魔物」退治の秘けつとは

憲法改正が大きな焦点となった第24回参院選の結果を報じた7月11日付の新聞各紙の1面には、改憲勢力の勝利を伝える「3分の2」の大きな活字が躍った。本紙は全国情勢に加え、神奈川県選挙区で当選した4氏も1面に得票順に見出しと顔写真を入れた。

今回の選挙報道は改憲勢力もさることながら、定数が4に増えて大混戦となった地元の結果をどう

載せるかがポイントだった。

紙面レイアウトを担当する整理部は事前の段取りが勝負。当落の結果だけではなく、候補者の明確の表情を伝える社会面の構成や見出しの言葉を、終盤情勢をにらみながら何パターンも用意した。

当日は本社独自の集計に加え、テレビや通信社の開票速報を参考にして紙面作りが進んだ。神奈川県で与党候補2人の当確が早かった

のは想定通り。3位の候補も午後11時にはバンザイをしたが、最後の議席はやはりもつれた。当確が出たのは午前0時半ごろ。想定よりは早かったものの、全国の選挙区で最後の決定だった。

日付が変わるところから編集局内は、記事を出稿する報道部のメンバーも入り交じって慌ただしさを増した。万端の準備で臨んでも、想定と実際では感覚のズレもあり、締め切りぎりぎりまで意見が飛び交った。内外の混乱の渦にのまれそうになったが、なんとか納得の紙面を出すことができた。

この日の1面には、選挙以外に全国高校野球選手権神奈川大会の開会式の記事と写真が載った。

今大会で3連覇を狙う東海大相模は、全国2連覇にも挑む。昨年の優勝は、神奈川県勢としては1998年の横浜以来、17年ぶり7度

目。「魔物がいる」といわれる甲子園の都道府県別優勝回数で全国3位タイに並んだ。

強豪ぞろいの甲子園で、神奈川県がなぜ強いのか。県高野連が発行する今大会の大会誌の中に、その一端が分かる特集がある。

記事の中で勝利の条件に挙げているのが「スタンドの一般の観客に応援してもらえるチーム」。

強ければ応援してもらえるわけではないのが難しい。その点、神奈川の球児は、日頃から相手捕手のマスクを拾うなど、基本的なマナーが身に付いている。甲子園で劣勢の中でも同じようにできればファンの応援がついてくる。

見渡せば「魔物」はどこにでも潜んでいる。周到な準備が、魔物退治の金棒だと改めて感じた。

(神奈川県新聞社整理部長)

岡部 仲康

# 混浴？ならぬ！

すっぱんぽんのビキニ・スタイルになる現代まで、水着も海水浴もいろんな変遷があった。

多くの人が大磯へでかけ「殊に驚くべきは、婦人たちの大胆にも浴場に遊泳し、塩気強き大波のおそろしき音にて来たるにも構わず、妻君令嬢並びに女教師女生徒らしき連中が、身に薄き金巾かねえの西洋寝巻をまとい、首に大なる麦わら帽をかぶり、三々五々あい携えて余念もなく海中に遊び戯るることなり」「浴場中には男女混同にて、荒波の急に注ぎくる時などに、慣れぬ婦人は狼狽のあまり、まず誰にでも手近く立ちたる人によりて助けられる場合もあれば、これが媒介となりて如何なる椿事の起るやも知れず」と1889

(明治22)年7月の朝野新聞。

彼女たちは薄いキヤラコの西洋寝巻で、浴場に入った。

20世紀になった1901(明治34)年7月の朝日新聞は、「海中に紅白の旗を立てて、海の浅いか深いかを知らせているだけで、男女の混浴は他の海水浴場と同じである。」「このような現状では大いに風俗を乱すため、婦人遊泳の場所へ幕を張り、全然男子と区別すべしとのこと。いよいよ海中に紅白の幕を打廻し、婦人浴場を設け

る」と報じた。

男と女がいつしよに海水浴をすると、風紀がみだれる。今後、海に紅白の幕を張って、男女を区別するからカクゴしろと。すっぱんぽんの入浴でなく、図①のような水着をチャーンと着ているのにダメとか。きびしいですねー。おなじ年の夏、湘南・クゲヌマ海岸にでかけた日本画家・川合玉堂は、区分けされた「浴場」を描いている。女性たちは図①を着て、とても泳げなかつただろうに。近くの図書館で玉堂の画集か、図録をご覧あれ。画題は《清風涼波》という絵巻である。



図①



図②

図②は海水浴をあくまで、療養のためと位置づけた広告主が「海の家」を建てたらしい。じつに無愛想な広告！ これを見て海水浴に行く気になつたかな。

海水浴は紀元前から、古代エジプトで行われていたという。近代になって18世紀後半イギリスで、医療効果ありと認定。イギリス南部のブライトン海岸が適地とされ、宮殿が建てられ、高級保養地になった。

日本では1881(明治14)年、医師でもある後藤新平が愛知県千鳥ヶ浜を推薦。85(明治18)年には医師・松本良順が大磯に海水浴場を開き、だんだん庶民のリクリエーションとして普及した。

(美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住)  
 (図①)1907(明治40)年、水着の広告。男女兼用で「褌衣」はシャツと読むそうな  
 (図②)横浜富岡「海水浴養生場」の広告。明治末期